

Brazil

【ブラジル】

写真・文＝永武ひかる(写真家)

もう一つのリオ
〜ファヴェーラ断章



カーニバルの公式会場サンボードロモ。
子どもカーニバルのパレードの合間、参
加者たちが、楽しそうに駆け抜けた



c
d



て、赤いロープウェイが通っている。そのゴンドラに乗って空中から眺めると、家並の間にスペースが見えた。強い日差しの下、サッカーのグラウンドで若者たちがボールを蹴っている。暴力的な社会に生きる少年たちを描いた映画『シテイ・オブ・ゴッド』。設定は今から半世紀ほど前だが、その舞台となったシ

タマ・ジ・デウスで子どもたちと話すとお気に入りのサッカーチームの話で盛り上がる。街の広場では、そろいの黄色いユニフォームを着た少年たちが手をつなぎ輪になっていた。「昔とはずいぶん変わったよ」。少年たちを率いるリーダーの男性は

感慨深げにそう言うと、皆を連れて、隣の芝のグラウンドで練習を始めた。UPPが最初に設置されたサンタマルタでは、丘の上のグラウンドにぎやかな声が響いている。迷路のような路地を下ると、柔術のクラスで子どもたちが組み合って汗を流していた。

- c. マカッソスの坂道で、喜び勇んでサッカーの練習に向かう少年に行き交った
- d. サンタマルタでは、柔術のクラスで大勢の子どもたちが組み合って歓声を上げていた
- e. 日差しが和らいだ夕方、サンタマルタの丘のグラウンドで若者たちがサッカーを楽しんでいた



e



a

喜々として子どもたちが会場を走り抜ける。色鮮やかな仮装やユニフォーム姿が続いて、付き添いの大人たちも後を追う。パレードの合間のくだけたひとときに観客も拍手喝采、温かい熱気に沸いた。毎年、サンバチームが競い合うリオの公式カーニバルの子どもの部。会場のサンボードロモは、この夏開催されるオリンピックの舞台の一つだ。屋根のないスタジアムから見える山肌には、ブラジルでファヴェーラと呼ばれるスラムに小さな家々が

ひしめき合う。リオの都市に混在して際立つ景観だ。リオにあるスラムの数は数百ともいわれ、有名なサンバチームの本拠地の多くもこれらのスラム地域に根差している。スラム住民は、リオ全体の人口の4分の1を占めるほどだという。軍警察による治安維持部隊（UPP）が配置されているいくつかの地区を訪れた。レンガを積み重ねた簡素な家やトタン屋根がぎっしりと大地を埋め尽くす複合スラム地域、アレマン。なだらかな丘に沿っ



b

- a. 複合スラム地域アレマンとロープウェイ。駅の近くにUPPが常駐している
- b. カーニバルの会場サンボードロモは、今夏オリンピック競技場の一つ。世界的なブラジル人建築家オスカー・ニーマイヤーの設計で、向かい合う2つの観戦スタンドの間にパレード道が横に長く伸びる。その場外の丘には簡素な家々が並ぶ



- i. 家の壁がグラフィティで彩られたプラゼーレスの路地
- j. 写真ワークショップの一環として、自分たちが暮らす地区のグラフィティ・ストリートを写す子どもたち



永武 ひかる (ながたけひかる)

世界各地で撮影・取材を行い、ブラジルでの活動は20年を超える。2000年から世界の子どもたちが参加する非営利の写真プロジェクト「ワンダーアイズプロジェクト」を主宰。近著は、リオの小学生の暮らしに1年間寄り添った写真絵本「世界のともたち3 ブラジル」。

■「ワンダーリオ」写真展

写真家・永武ひかると、リオのスラムの子どもたちが写した写真約100点を通して、リオの魅力や素顔に迫る。
 会場：海外移住と文化の交流センター（神戸市）
 会期：7月28日（木）～8月31日（水）
 URL：www.wondereyes.org



g

コパカバーナ海岸に近いタバジャラス。坂を上ると家の壁に彫られた大きな肖像画が目飛び込んできた。温かみのある深いまなざし。「亡くなったおじいさんをしのんで、お母さんがアーティストに頼んだの」と、その家の少女が教えてくれた。

丘の斜面に伸びるプラゼーレスでは、路地の一角に入った途端、アートの世界に引き込まれた。赤や黄、水色にピンク、鳥や花、キャラクターなどが、流れる線や模様で彩られ、心にリズムを湧き起こす。アーティストが家の壁に描いたグラフィティのオンパレードだ。

「こんなアートプロジェクトが実現するとは思ってもみなかった。気分が明るくなる」と、住民は話した。ファヴェーラに暮らす人々は、それぞれに事情は千差万別で、格差社会や治安などの問題も多い。けれども、日々の営みの中で文化が生まれいく、そのエネルギーがあった。



f



h

- f. タバジャラスの家の壁に彫られた亡き家族の肖像。まなざしが語りかけるかのようだ
- g. モーホ・アズウの自治会に貼られた昔の写真と、添えられた言葉。「私たちの地区の苦難の歴史を知ってる？今の暮らしは楽園」
- h. サンタマルタの銃弾の跡が残る壁。明るい街並みが描かれ、その上にUPPが常駐する

南部のお茶の楽しみ方といえば

シマロン



さまざまな色や柄のクエアが、お茶の時間を楽しく演出してくれる（提供：日本マテ茶協会）

南米の亜熱帯地域は、マテ茶の原産地だ。日本でも最近、見掛けるようになったマテ茶だが、ブラジル南部では、“シマロン”という飲み方で楽しまれている。

お湯を注ぐ器は「クエア」と呼ばれ、そこに「ボンバ」と呼ばれるストローを挿して飲むのがブラジル流だ。

家でのくつろぎの時間や仕事の最中、また、親しい仲間が集まった際には、何度もお湯をつぎ足して回し飲みをするなど、ブラジル南部の暮らしにシマロンは欠かせない。

歴史を紐解けば、ブラジル発見当時、南米大陸南部の先住民の間では、地位の高い人々だけがマテ茶を飲むことを許されていたという。

昔は、クエアにはヒョウタンなどが使われていたが、現在では瀬戸物やガラス製の器も多くなった。ボンバも、竹などの筒状の木材から、金属製の物が普及している。

ブラジルでは、毎年5月にフェナシン（FENACHIM）と呼ばれるシマロンのイベントが開催されている。昨年も、参加者12万人を超える大盛況となった。

ブラジルを訪れたら、ぜひシマロンでくつろぎのひとつを過ごしてみたいだろうか。

取材協力：NPO法人ABT豊橋ブラジル協会

地球ギャラリー

ブラジルの文化を知ろう！

ブラジル料理といえば

シュハスコ

ブラジルでは、週末の家族の団らんとパーティーなど、大勢で食卓を囲むとき、必ず「シュハスコ」が登場する。シュハスコは、牛や豚、鳥のさまざまな部位の肉を鉄串に刺し、シュハスケイラと呼ばれる専門のグリルで焼くブラジリアンBBQだ。お店では、肉を焼く人はシュハスケイロ、客席でシュハスコを切り分ける人はパサドルと呼ばれる。

東京の秩父宮ラグビー場近くにあるブラジル料理店「イグアス」でチーフシ

ュハスケイロを務めるアゼヴェド・エルトンさんは、「ブラジルでは、各家庭にシュハスケイラがあります。マンションにも、ベランダに小型のものを置いています」と語る。肉に付けるソースの味も、それぞれ家庭の味があるようだ。イグアスでは、酸味のきいたピネガーソースを提供している。

ラグビー観戦後は、仲間と共にシュハスコでさらに盛り上がりはどうか。



【RECIPE】

●材料(10人前)

牛または豚、鶏の赤身肉400～500g / 岩塩適量

ソース:

ピネガー・玉ねぎ・トマト・ピーマン各適量

- 1 肉の表面の水分をよく拭き取り、全体に岩塩を振りかける。
- 2 鉄串を刺し、シュハスケイラの中(もしくはバーベキューコンロの上)でゆっくり回しながら表面に焦げ目がつくまで炭火で焼く。焼き加減は、ミディアムレア。
- 3 焼けた部分からナイフで削ぎ取って食べる。赤身部分が多くなったら、塩を振ってまた表面を焼く。
- 4 大きさが最初の3分の1程度になったら、串から外し切り分けて食べる。

ソースの作り方:

玉ねぎ、トマト、ピーマンをみじん切りにし、ピネガーを加える。

【SHOP INFORMATION】

ブラジル料理 レストランテ・グリル・ イグアス

〒107-0061

東京都港区北青山2-7-25

神宮外苑ビル2F

電話番号:03-5414-1010

営業時間:月～土曜日:[ランチ]11時半～14時(ラストオーダー)

[ディナー]18時～21時半(ラストオーダー)

[バータイム]21時～夜中

日曜日:[ディナー]16時～21時(ラストオーダー)

